

14 資料紹介 安政の大地震

歴史文化情報センター

はじめに

平成 23 年 3 月 11 日、東日本を襲った地震と津波は、政治の混迷とデフレ不況にあえぐ国民に衝撃的なものであった。大地震や大津波は、太古より繰り返し襲来している。今回は黒船来航以来、騒然とした世の中になった安政元年に起こった安政東海地震の様子を中心に『静岡県史』を参考に幾つかの資料を紹介する。

1 安政東海地震

(1) 津波の被害

嘉永 7 年（安政元年）11 月 4 日（1854 年 12 月 23 日）遠州灘でマグニチュード 8.4 の巨大地震が発生した。関東から近畿及び山梨、長野県にわたり震度 5 から 7 の激しい揺れに見舞われた。さらに、房総半島から土佐までの沿岸部は、津波に襲われ、特に遠州灘沿岸部には 6 m の津波が押し寄せた。^{*1}

地震発生から 32 時間後、先の震源地からはるか西に離れた南海道沖で、マグニチュード 8.4 の地震が発生した。これが安政南海地震である。立て続けておこった 2 つの地震・津波による被害は、潰れ焼失した家屋約 3 万軒、死者は約 2 千人から 3 千人に達したと考えられている。^{*2}

被害を受けたのは日本人ばかりではなかった。幕府と開港交渉のため来日していたロシアのプチャーチン提督のディアナ号が、ちょうど下田の若の浦に停泊していたのである。ディアナ号は 6 m ほどの津波を受け大破し、自力での航行が不能となった。修理のため戸田（沼津市）に曳航する途中難風をうけ、結局、宮島村（富士市）沖で沈没した。



写真 1 津なみ塚（下田市 稲田寺）

下田市に所在する稲田寺（とうでんじ）境内には、高さ約 3.3m の石碑が建っている。石塔の頂部には蓮華座に趺坐（ふざ）する地藏菩薩像を配置し、正面に「津なみ塚」、側面に「嘉永七年甲寅十一月四日」の文字が刻まれている。下田では、安政東海地震で 122 人が流死したと伝えられており、この石塔は、その供養のため時の下田奉行 伊沢美作守政義が自費で建立したものである。

津波被害は県東部だけではない。遠州灘の海岸部も高さ 3 m から 6 m の津波に襲われ、浜名湖の舞坂宿で 74 軒の家屋が流出し、新居宿でも 170 軒の家屋が壊れている。県中部地域では地震による土地の隆起も手伝って大きな被害は避けられたが、古文書にはいたるところで津波被害が発生していたことが記されている。

(2) 地震の被害

地震の揺れによる被害も甚大なものであった。沼津藩の祐筆（藩主に侍して文章を書く役職）山崎継述（やまざき つぐのぶ）が記した『嘉永七甲寅歳地震之記』には、先述したロシアのディアナ号の沈没後、田子の浦（富士市）に上陸する乗組員の様子のほか、沼津城内で地震の揺れに遭遇した時の様子がリアルに記されている。沼津城下の被害状況も詳細に描かれており、例えば、小林村（沼津市）の大規模な陥没災害について「小林村御城より一里北東にあたる 凡家拾貳軒程土中にめり込 死者九人之内七人追々掘出し貳人は終に不知 大地めり込凡幅五拾間程 長貳町程 深四五丈 立木などそのままなるもありて如深谷 大石所々散乱ふたたび住居も覺束なく見えたり 六七尺の地何ヶ所と言事をしらず」と絵を添え細述している。概約すれば、



写真2 小林村変地之図『嘉永七年甲寅歳地震之記』（沼津市明治史料館）

「沼津城から一里北東にある小林村で12軒の家が土地の陥没により地面に飲み込まれ、死者9人のうち7人が掘り出されたが2人は発見できなかった。陥没の範囲は、幅50間（約100m）、長さ弐町（約217m）、深さ4～5丈（約12m～15m）であった。」ということである。現在、付近にこの災害の状況を記した石碑が建てられている。その他『嘉永七甲寅歳地震之記』には、沼津市の下香貫のあたりで田地が湖水になったことも報じており、地震により沼津城下に深刻な被害が生じていたことがわかる。^{*3}

静岡県西部地域も東部地域と同様に大きな被害を受けていた。遠州灘から3km内陸にある下大之郷村（磐田市）では、村内の民家（主家及び大日堂等）約90軒のほとんどが倒壊し、死者まででている。

このような家屋倒壊状況は、下大之郷から内陸部へ約13kmのところにある中飯田村（森町）や大井川沿いにある河原町、瓦町、仲町付近（島田市）でも同様であった。さらに吉永郷上川原嶋（大井川町）では液状化現象が発生し、水田にできた地割れから泥水が吹き出し、田畑以外に100軒の家屋が被害を受けたとの記録が残されている。津波の被害が比較的少なかった県中部地域でも土地の隆起が起これ、蒲原宿から小金村の半分（静岡市）は地震の揺れと火災により1軒残らず崩れ焼けたようである。

安政東海地震の被害状況を概観すると、中部地域にくらべ東部地域と西部地域が津波により甚大な被害を受けたといえる。^{*4}

2 安政東海地震の余震と連続する巨大地震

(1) 安政南海地震

安政東海地震から32時間後の11月5日、先の地震震源地からはるか西の南海道沖でマグニチュード8.4の巨大地震が発生した。被害範囲は中部地方から九州にまでおよび、特に紀伊半島及び四国沿岸部に大きな被害を与えた。余震は40日間続き、人々は竹藪のなかで過ごしたという。^{*5}

(2) 安政東海地震の余震

これに追い打ちをかけるように安政2年9月28日（1855年11月7日）、遠州灘を震源とする安政東海地震の最大余震がおこった。先の安政東海地震で被害大きかった遠州灘沿岸が再び大きな被害をうけた。米津村（浜松市）で27軒が倒壊し、天竜（浜松市）では大沢口が崩壊した。舞阪宿では3～4箇所の地割れが発生し、泥水が噴き出る液状化現象がおこった。^{*5}

(3) 安政江戸地震

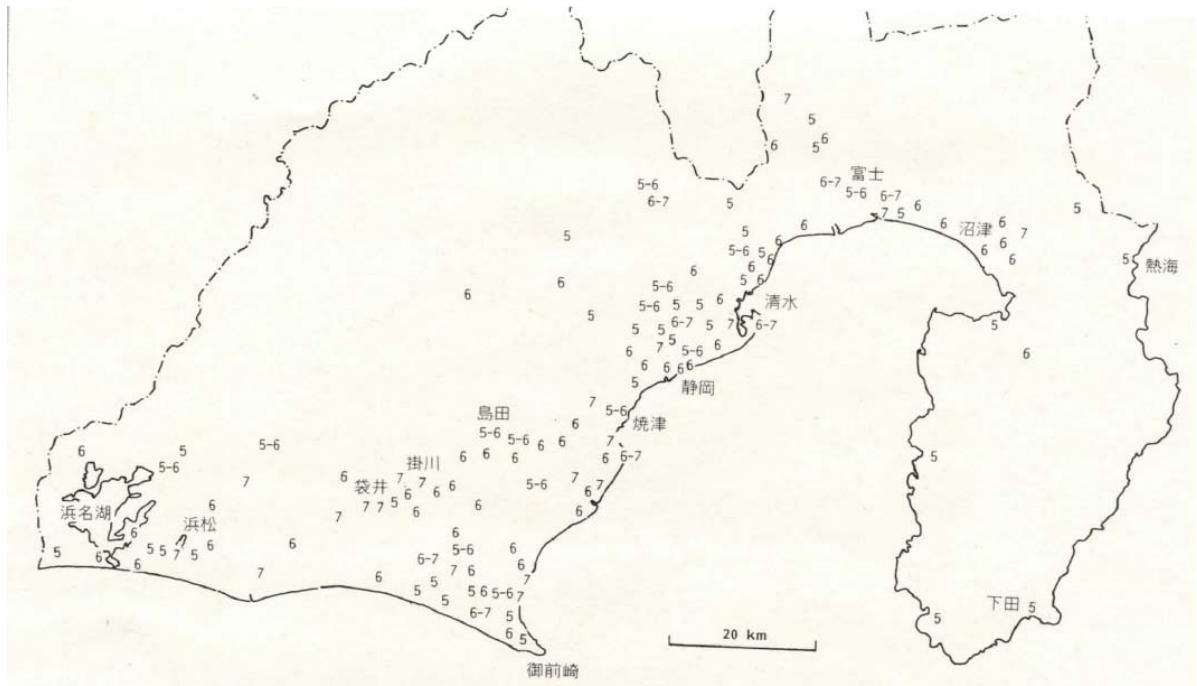


図 安政東海地震の震度分布 (土 隆一「地震と災害の特徴」『静岡県史』別編2 自然災害誌 1996 静岡県)

安政2年10月2日(1855年11月11日)、安政東海地震の余震の恐怖も醒めやらないうちに、江戸をマグニチュード6.9の直下型地震が襲った。江戸での民家の倒壊は14000軒以上、大火災も発生し、死者は1万人にも達した。この地震の影響は静岡県東部地域にも及び、下田では市中が大騒ぎとなり人々は寺々

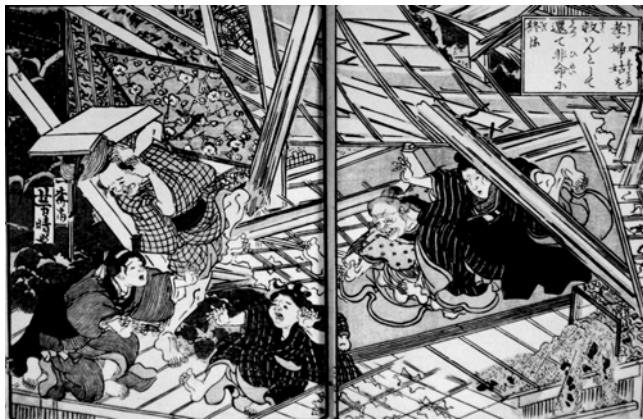


写真3 安政見聞録(防災専門図書館)

へ避難している。先の安政東海地震の恐怖が蘇ったことであろう。^{*5}

(4) 安政駿河地震

巨大地震はその後も発生した。今度は安政4年5月23日(1857年7月14日)マグニチュード6.7の直下型地震が、大井川下流を震源として発生したのである。特に藤枝あたりで強く揺れ、田中城の塀や石垣が崩れるなど被害がでている。

駿府城下でも土蔵の破損など被害が発生し、余震があるたびに人々は広場に飛び出した。安政東海地震のことを思い起こしたことであろう。^{*5} 黒船来航と時を合わせたかのように発生した巨大地震は、人々に大きな不安をもたらした。この後社会は、「尊王攘夷」さらに「尊王倒幕」へと向かい、やがて明治維新へといたる。

注及び参考文献

- *1 『安政東海地震津波被害調査報告書』 1986 静岡県地震対策課
- *2 『四大地震(明応・宝永・安政東海・東南海)の調査と比較』1980 東海地方の地震被害調査研究グループ
- *3 「2 安政東海地震の各地の様相」『静岡県史』別編2 自然災害誌 1996 静岡県
- *4 「3 安政東海地震にともなう津波被害」『静岡県史』別編2 自然災害誌 1996 静岡県
- *5 「第2節 近世・近現代 1 地震災害」『静岡県史』別編2 自然災害誌 1996 静岡県